■ 投 稿 論 文

都市居住高齢者のソーシャルサポート授受

— 家族類型別モラルへの影響 —

平 野 順 子

要 約

本稿では、都市高齢者のソーシャルサポート授受のパターンと、ソーシャルサポートとモラルとの関連性について検討した。都内在住の65歳以上の高齢者に対して質問紙調査を実施し、最終的に780名のデータを分析対象とした。分析を行う際、対象者の世帯における配偶者と同居子の有無という家族類型に着目して、4つのグループに分類した。結果は以下のとおりである。①4群いずれにおいても、情緒的サポートは家族や友人や近隣といったサポート資源と自発的にサポート授受を行っていた。②手段的サポートと介護的サポートは主に家族との間で授受されていた。したがって、これらのサポートは家族人数の減少につれて授受も減少していった。③「サポートを受領する必要がない」という自立性は、サポートの授受そのものよりもモラルに対して正の影響があった。④夫婦のみ世帯では、男性の場合、配偶者への提供サポートがモラルに正の影響をもっていた。一方、女性の場合、配偶者への提供サポートは、モラルに対して負の影響を持っていた。⑤配偶者も同居子もある男性では、子どもとの互酬的なサポート授受が高いモラルと関連していた。⑥4つの群の中で、配偶者と子どもの両方とも同居している群で最もモラル得点が高く、同居していない群に移行するにつれモラル得点が低下していた。

キーワード：ソーシャル・サポート、モラル、高齢者

Social Support of the Urban Elderly : The Effect of Family Patterns on Morale

Junko Hirano

Abstract

This study examined a pattern of social support exchange among the elderly and its impact on morale. Questionnaires were given to those aged 65 and over who live in Tokyo. The final sample consisted of 780 elderly respondents. I divided the sample into the four groups based on their family patterns, i.e., whether the elderly had a spouse or child in the same household. Major findings are as follows: ①In all four groups, emotional support was voluntarily exchanged between the elderly and family, friend and neighbors. ②Instrumental support and care were mainly exchanged between the elderly and their family members. Consequently, the exchange of instrumental support was reduced as the number of family members decreased. ③Elderly's own independence had more positive impact on their morale than exchange of support itself. ④Providing support for a spouse had positive impact on morale for men living with their spouses alone, but had negative impact on morale for women living with their spouses alone. ⑤Higher morale was related to reciprocal support exchange with children among men living with both their spouses and children. ⑥Among the four groups, the elderly living with their spouses and children reported the highest morale, but their morale declined as they moved to single living.

Keywords : social support, morale, the elderly

Doctoral Student, Research Dept. of Human Culture, Ochanomizu Univ.

1 はじめに

1970年代に高齢者のソーシャルサポートについて注目され始めてから、多くの成果が蓄積されてきた。その初期には、社会福祉的な視点から高齢者のサポート受領に焦点を当て、高齢期に誰からどのようなサポートを得ているか、または得られるかについて主に検討されてきた。その中で、年齢にかかわらず、高齢者がサポートを受領する相手には階層性があること、その階層は一般的に「配偶者—子ども—親族—友人—近隣」となっており、配偶者や子どもといった家族員がサポートにおいて重要な役割を果たすことが言われてきた（野口，1991b）。杉井（1992）は、高齢者の家族形態を核家族、拡大家族、独り暮らしと3分類し、核家族、拡大家族の高齢者では、身辺介護、情緒的問題、経済的問題というどの領域のサポートについても配偶者から、その代替として子どもからの受領を期待しており、独居高齢者では子どもからの受領を期待している、という結果を得ている。また、高齢者の年齢が上昇しても子どもや友人からのサポート受領には変化がないということも明らかにされている（Depner and Aantonucci, 1988）。1980年代以降より、寿命の延びや健康な高齢者、社会参加する高齢者の増加に伴い、サポートの受領だけではなく提供についても注目されるようになった。そこではサポートの受領と提供の相互作用に注目し、社会的交換理論や衡平理論の立場から高齢者と周囲とのサポート授受について検討され、一般的に高齢になるほどサポートの提供が減少し、受領が増加するということが明らかになっている。これはArling（1976）の言う「役割逆転」を示すものである。役割逆転とは、高齢期以前は子どもなど周囲へのサポート提供が多かったにもかかわらず、高齢期になると逆に受領が多くなるという、サポート授受における立場の逆転を指す。この際、高齢者はそれまでのサポート提供によって預金されてきた「サポートバンク」から、高齢になってサポートが必要になった時に引き出している（Antonucci, 1990）。しかし、「高齢者＝サポートの受領者」という認識が強いということはいまだに否定できない。

では、高齢期のサポート授受において重要な役割を果たしている子どもや配偶者など家族員がいない高齢者にとって、それ以外の者がサポート授受の相手となっているだろうか。現代は核家族化が進み、子どもが進学や就職、転勤のために遠隔地へ行くことも珍しくない。そのように身近な親族と地理的に離れることによってサポート授受の可能性が低下することは今後とも予想されることである。近年高齢者の社会活動が自由になって友人との交流も活発となり、家族以外の者とのサポート授受の可能性も広がっている。家族類型によっては身近な親族からサポートを得にくいと考えられるが、高齢者が実際にサポート授受を行う相手は家族類型によって異なるのであろうか。このような疑問が先行研究においては明確化されていない。

2 ソーシャルサポートとモラール

以上のように隆盛なサポート研究であるが、明確な理論的枠組を欠いており、その定義や研究方法ははっきりしていない（浦・南・稲葉，1989；野口，1991a）。しかし、サポートを社会関係の質的側面と捉え、「対人関係の機能的側面に着目したもの」という定義は代表的なものである（野口，1991b）。本稿でも先行研究で使われている定義を用いる。

サポート研究においては、高齢者のサポート授受の実態把握のみならず、それが幸福感や生活満足度などに与える影響についても検討されてきた。その際に最も用いられて来た概念の1つに「モラール」

がある。モラルとは直訳するならば「士気」と訳されるものであるが、研究レベルでのモラルとは「主観的幸福感」として用いられることが多く（杉井, 1992）、自記式の尺度によって測定される高齢者の幸福度の度合いの一つである。Lawton (1972) は、「モラルが高い」ということは、①自分自身についての基本的な満足感をもっていること、②環境の中に自分の居場所があるという感じをもっていること、③動かしえないような事実についてはそれを受容できていること、としている（古谷野ら, 1989；杉井, 1992）。

モラルや幸福感に関する初期の研究から、相関分析や回帰分析の手法を使って、高齢者の様々な属性要因や社会要因との関連についての検討がなされてきた。特に健康度、教育や収入などの社会経済的要因、年齢、性別、職業、婚姻状態との関連性については非常に多くの研究成果（石原・内藤・長嶋, 1989；横山, 1989；古谷野・岡村・安藤他, 1995）が蓄積され、ほぼ一貫した知見が得られている。このような流れの中、様々な資源を喪失する高齢期において、どのようなサポートが誰から得られるのがよいのかという視点に立った、幸福感とサポートとの関連性についての研究も見られた。

サポートの授受そのものがモラルに与える影響については、必要なサポートが受領できることは高いモラルにつながるのが一般的であるが、最近は低いモラルにつながる「ネガティブサポート」の存在も明らかになりつつある。またサポートの互酬性（reciprocity）がモラルに与える影響については、Robert ら（1986）や McCulloch（1990）などのようにサポートの交換と高齢者の幸福感とは関連性のないことを明らかにしたものや、金ら（1996）のようにサポートの授受ともに多い高齢者は生活満足度が高いことを明らかにしたものなど様々な結果が示されている上、わが国においてはデータの蓄積はまだ乏しいと言えよう。またその相手については、配偶者や子どもといった家族員とのサポート授受が高い満足度につながるものの、それら以外の者とのサポート授受がモラルに与える影響については一貫した結果が出ていない。本稿は、これらの課題を明らかにするために、受領／提供の両側面からサポートの現状を家族類型別に明らかにし、それが高齢者のモラルにどのような影響を与えているのかを明らかにすることを目的とする。

3 方法

1995年8月、東京都内3地域（世田谷区、台東区、東久留米・清瀬市）の在宅の65歳以上の男女1409名を無作為抽出して個別面接調査法を行った⁽¹⁾。この3地域を選定したのは、山の手的な世田谷区、下町的な台東区、新興住宅地的な東久留米・清瀬市という特色の異なった地域を選定することにより、幅広い居住者層を調査するためである。東久留米・清瀬市が2市にまたがるのは、他の2区と母集団の規模を同じくするためである。回収した995名中、不完全回答者を除いた対象者は792（男性278、女性514）名であった。本稿では対象者の家族類型に着目して分析するため、同居家族について、配偶者の有無と同居子の有無という2×2のマトリックス表を作成し、それに該当しない者を分析対象からはずした。その結果、最終的に分析対象となったのは777（男性277、女性500）名であった（有効票率55.1%）。

調査対象者の平均年齢は73.4歳（SD=6.16）で、その年齢階層別割合は65～69歳32.2%、70～74歳28.8%、75～79歳20.1%、80歳以上18.9%であった（range 65～97歳）。有配偶者の割合は、男性84.5%、女性39.3%であった（ $p<0.01$ で有意差あり）。同居子ありの者の割合は、男性43.0%、女性45.7

%であった。学歴は、旧制小学校・旧制高等小学校卒46.6%、旧制中学校・高等女学校卒37.5%、旧制・新制高校・高等師範学校卒8.6%、新制短大・高専・大学卒7.3%であった。現職は、無職69.4%、自営業者・家族従事者16.1%、勤め人4.8%、パート6.0%、その他3.7%であった。

4 調査項目

調査項目は表-1の通りである。授受のあったサポートについては、「この6ヶ月くらいの間に(ア)～(カ)のようなことを、誰かがあなたにしてくれましたか」、「反対に、この6ヶ月くらいの間に(ア)～(カ)のよ

表-1 質問項目一覧

受領サポート

- (ア) あなたが、元気がないとき、元気づけてくれた人はいましたか。
 - (イ) 変わったことがないか、あなたの様子を見てくれる人はいましたか。
 - (ウ) 金銭管理に関しての手伝い、例えば収支の管理、医療費の支払い、年金・貯金通帳の管理といったことをしてくれた人はいましたか。
 - (エ) 季節ごとの衣類の入れ替えや大掃除などをしてくれた人はいましたか。
 - (オ) 生活費や資産運用などについて相談にのってくれた人はいましたか。
 - (カ) あなたの体の調子が悪いとき、世話をしてくれた人はいましたか。
- 1 近所の人 2 親しい友人 子ども(子どもの配偶者) 4 子ども以外の親族
5 配偶者 6 その他の人() 7 役所・カウンセラーなどの専門家
8 誰もいない 9 そのようなことは必要なかった 10 わからない

提供サポート

- (ア) 元気がない人がいたとき、元気づけてあげた人はいましたか。
 - (イ) 変わったことがないか、様子を見てあげた人はいましたか。
 - (ウ) 金銭管理に関しての手伝い、例えば収支の管理、医療費の支払い、年金・貯金通帳の管理といったことをしてあげた人はいましたか。
 - (エ) 季節ごとの衣類の入れ替えや大掃除などをしてあげた人はいましたか。
 - (オ) 生活費や資産運用などについて相談にのってあげた人はいましたか。
 - (カ) 体の調子が悪い人がいたとき、世話をしてあげた人はいましたか。
- 1 近所の人 2 親しい友人 子ども(子どもの配偶者) 4 子ども以外の親族
5 配偶者 6 その他の人() 7 そのような人はいない 8 わからない

改訂版P.G.C. モラールスケール (17項目)

基本属性

うなことを、あなたが誰かにしてあげましたか」という質問をした。回答者はサポート授受のあった相手を選択肢の中から全て選び出す Multiple Answer 方式をとった。これらの質問項目は、Litwak (1985) における質問項目中、明らかに現代のわが国には適合しない項目を除いたものである。本研究においてこのような質問項目を引用したのは、①Litwak の研究は、高齢者が第一次集団の中から得ているサポートについて構造的に捉えようとしたという意味で本研究の目的と一致している、②Litwak の研究では注目されていなかった、高齢者の「サポートの提供者としての側面」という点に注目して、サポートの授受の様子を構造的に捉えようと試みたいという2つの理由による。サポートの種類について、先行研究では情緒的／手段的サポート（野口, 1991b）、生活的／物質的／情緒的サポート（河合・下仲, 1992）などと分類されているが、本研究では情緒的／手段的／介護的サポートと分類した。質問項目中で、「元気がないときの元気づけ」と「変わったことがないか様子を見る」は情緒的サポート、「金銭管理に関しての手伝い」、「衣類の入れ替えや大掃除などの手伝い」、「資産運用などの手伝い」は手段的サポート、「体調が悪いときの世話」は介護的サポートと定義することとする。また、その相手については、より広範囲の者との授受を想定し、第一次集団にとどまらず幅広い選択肢を設定した。

モラールを測定するために、P.G.C.モラールスケール（17項目）を用いた。このスケールを使用した理由は、わが国においても多くの先行研究で用いられており、十分な信頼性、妥当性が得られていること、わが国においても尺度の因子構造がほぼ確定したものが得られていることの2点である。この尺度は、17項目の質問に対して「はい」または「いいえ」で回答し、ポジティブな意味を持つ回答に対しては1点が与えられ、合計点の range は0～17点となる。平均点11.83点（SD=3.59）、 α 係数=0.70であった。

5 結 果

(1) 家族形態による類型化

各サポートの授受の有無、またサポート授受を行っている場合のその相手について見る。前述の通り、高齢者のサポート授受の相手については、配偶者と子ども、特に同居子が重要な役割を果たしていることが明らかになっているため、ここでは家族類型別、特に配偶者と同居子の有無に着目して検討する。また、対象者を家族の中の年長者と位置づけて分析を行うため、親（又は義理の親）と同居している場合、配偶者とも子どもとも同居していないが他の家族員がいる場合は、分析対象からはずした。家族の類型化については表-2に示した。この表での「子ども」には「子どもの配偶者」を含んでいる。

表-2 家族類型の枠組

		子　ど　も	
		有　り	無　し
配　偶　者	有　り	I	II
	無　し	III	IV

I 群は、配偶者と同居子のある高齢者であり、それ以外の家族員（孫やきょうだいなど）を含む場合もある。II 群は、配偶者はいるが子どもとは別居の夫婦のみ世帯の高齢者である。III 群は、配偶者はいないが子どもとは同居している高齢者である。このタイプには、子どもとの同居に加えて他の家族員（孫やきょうだいなど）と同居している高齢者も含まれる。IV 群は、誰とも同居していない、独居高齢者である。各群の該当者の割合は、I 群が199名（25.6%）、II 群が231名（29.7%）、III 群が148名（19.1%）、IV 群が199名（25.6%）であった。各群における男女比は、I 群が男性51.8%、女性48.2%、II 群が男性56.7%、女性43.3%、III 群が男性10.6%、女性89.4%、IV 群が男性13.6%、女性86.4%であった。配偶者のいないIII・IV 群は、9 割近くを女性が占めていた。また各群の平均年齢は、I 群が71.9歳、II 群が72.2歳、III 群が75.9歳、IV 群が74.4歳であった。I・II 群の間には有意差はなかったが、それ以外は各群の平均年齢の間に有意差が見られた。また各群のモラル得点の平均値は、I 群が12.45点（SD=3.37）、II 群が12.10点（SD=3.55）、III 群が11.37点（SD=3.48）、IV 群が11.21点（SD=3.83）であった⁽²⁾。

(2) 高齢者のソーシャルサポート受受の実態

表-3、表-4 はそれぞれ、受領・提供サポートの有無とその相手の割合を示したものである。まず、受領サポート（表-3）から検討する。サポート受領の有無については、情緒的サポートでは家族類型において有意差は見られなかったが、手段的・介護的サポートでは、いずれも有意差が見られた（ $p < 0.01$ ）。つまり、情緒的サポートの受領は配偶者や同居子の有無とは関連がないが、その他の手段的・介護的サポートの受領については、同居子がいる群（I・III 群）よりもいない群（II・IV 群）の方がサポートを受領した者の割合が低く、受領しなかったができなかった者の割合が高い。すなわち、情緒的サポートとは異なり、手段的・介護的サポートは主に子ども、または配偶者が大きな役割を果たしており、それ以外の者はこれらのサポートの提供者とはなりにくいと言える。

次に、高齢者に対するサポートの提供主体について見ていく。ここで特徴的なことは、配偶者のいるI・II 群はいずれのサポートも配偶者から最も多く受けており、配偶者がいないIII・IV 群は、IV 群の「元気がないとき元気づけてもらう」以外のサポートを、子ども、子どもの配偶者から最も多く受けている。独居のIV 群では、別居子が主なサポート提供主体であることが分かる。どの家族類型においても、情緒的サポートは血縁者に限らず広範囲の相手から受領しているが、それ以外のサポートの提供主体は配偶者と子どもに特化している傾向が見られる。

次に提供サポートについて見ていく（表-4）。サポート提供の有無については、「元気づけてあげる」（ $p < 0.05$ ）と全手段的サポート（ $p < 0.01$ ）において、家族類型による有意差が見られた。「元気づけてあげる」については、配偶者のいるI・II 群が、いないIII・IV 群よりも提供した者の割合が高い。手段的サポートについては、I～IV 群に移行するにつれてサポートを提供した者の割合が顕著に低下している。

次に、高齢者がサポートを提供した相手について見ていく。情緒的サポートでは、受領の場合と同様、血縁者に限らず広範囲の相手に対して提供していたが、それ以外のサポート（特に手段的サポート、有配偶者の介護的サポート）では、配偶者や子どもといった血縁者に特化される傾向が見られた。

表-3 受領サポートの有無とその相手(%)

サポートの内容	家族 類型	誰 から か 受 け た	受 け た か っ た が、 誰 も い な か っ た	受 け る 必 要 は な か っ た	χ^2 検 定	受領した相手の内訳(M.A.)						
						配 偶 者	子 ども、 子 ども の 配 偶 者	子 ども 以 外 の 親 族	親 し い 友 人	近 所 の 人	専 門 家	そ の 他 の 人
元気づけてくれる	I	36.2	8.0	55.8		72.2	59.7	11.1	20.8	22.2	0.0	2.8
	II	43.3	4.8	51.9		72.0	40.0	7.0	30.0	16.0	2.0	2.0
	III	50.0	6.1	43.9		—	80.0	21.3	28.0	21.3	1.3	4.0
	IV	40.7	8.5	50.8		—	37.0	21.0	37.0	40.7	4.9	7.4
様子を見てくれる	I	39.2	9.0	51.8		64.1	65.4	7.7	7.7	10.3	0.0	1.3
	II	47.2	6.5	46.3		62.3	45.9	8.3	8.3	10.1	4.6	2.8
	III	48.6	7.4	43.9		—	87.7	17.8	13.7	12.3	1.4	1.4
	IV	54.3	9.5	36.2		—	44.4	16.7	15.7	26.9	11.1	7.4
金銭管理の手伝いを してもらう	I	34.7	7.5	57.8	**	85.5	17.4	1.4	0.0	0.0	0.0	0.0
	II	32.0	8.2	59.7		94.6	8.1	2.7	0.0	0.0	0.0	0.0
	III	26.4	6.8	66.9		—	94.9	10.3	0.0	0.0	0.0	0.0
	IV	7.5	17.6	74.9		—	73.3	6.7	6.7	0.0	6.7	6.7
衣類の入れ替えなどの 手伝いをしてもらう	I	44.7	9.0	46.2	**	85.4	32.6	3.4	0.0	0.0	0.0	2.2
	II	43.3	9.5	47.2		86.0	18.0	2.0	1.0	0.0	1.0	2.0
	III	24.5	13.2	62.3		—	94.6	8.1	0.0	0.0	0.0	0.0
	IV	10.1	17.6	72.4		—	55.0	10.0	5.0	5.0	10.0	20.0
資産運用などの手伝い をしてもらう	I	34.7	7.5	57.8	**	87.0	27.5	1.4	0.0	0.0	0.0	1.4
	II	34.6	8.2	57.1		90.0	17.5	2.5	0.0	0.0	0.0	0.0
	III	29.7	6.1	64.2		—	93.2	6.8	0.0	0.0	2.3	0.0
	IV	12.1	12.6	75.4		—	70.8	12.5	4.2	0.0	4.2	8.3
体調が悪いときに世話 をしてもらう	I	46.2	4.5	49.2	**	73.9	57.6	3.3	2.2	2.2	0.0	1.1
	II	48.9	3.5	47.6		90.3	20.4	2.7	0.9	0.9	0.9	0.9
	III	44.6	3.4	52.0		—	100.0	9.1	3.0	3.0	3.0	0.0
	IV	28.6	7.0	64.3		—	49.1	15.8	10.5	3.5	3.5	8.8

注1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

注2 「受領した相手の内訳」は、「受領した」と回答した者のうち、その相手に提供した者の割合を示している。

表-4 提供サポートの有無とその相手（％）

サポートの内容	家族 類型	誰 か に 与 え た	誰 にも 与 え な か っ た	χ^2 検 定	提供した相手の内訳（M.A.）					
					配 偶 者	子 ども、 子ども の配 偶者	子 ども 以外 の親 族	親 し い 友 人	近 所 の 人	そ の 他 の 人
元気づけてあげる	I	31.2	68.8	*	24.2	6.5	4.8	41.9	25.8	9.7
	II	41.1	58.9		24.2	4.2	13.7	37.9	29.5	11.6
	III	26.4	73.6		—	13.2	10.5	42.1	36.8	5.3
	IV	33.7	66.3		—	4.5	9.0	34.3	49.3	9.0
様子を見てあげる	I	17.1	82.9		32.4	8.8	11.8	17.6	29.4	11.8
	II	24.2	75.8		26.8	1.8	19.6	23.2	25.0	5.4
	III	18.9	81.1		—	18.5	22.2	29.6	33.3	0.0
	IV	24.6	75.4		—	6.1	8.2	22.4	65.3	6.1
金銭管理の手伝いを してあげる	I	9.0	91.0	***	50.0	0.0	5.6	5.6	0.0	5.6
	II	8.2	91.8		73.7	10.5	15.8	5.3	0.0	5.3
	III	6.1	93.9		—	60.0	40.0	0.0	0.0	0.0
	IV	1.5	98.5		—	33.3	33.3	0.0	0.0	33.3
衣類の入れ替えなどの 手伝いをしてあげる	I	8.0	92.0	**	56.3	0.0	0.0	0.0	0.0	6.3
	II	8.2	91.8		73.7	0.0	10.5	5.3	5.3	5.3
	III	6.1	93.9		—	60.0	40.0	0.0	0.0	0.0
	IV	1.0	99.0		—	0.0	0.0	0.0	50.0	50.0
資産運用などの手伝い をしてあげる	I	9.0	91.0	**	16.7	22.2	0.0	16.7	5.6	11.1
	II	11.7	88.3		59.3	7.4	14.8	7.4	11.1	3.7
	III	8.8	91.2		—	61.5	15.4	15.4	0.0	0.0
	IV	2.0	98.0		—	50.0	25.0	0.0	0.0	25.0
体調が悪いときに世話 をしてあげる	I	15.1	84.9		43.3	3.3	10.0	10.0	23.3	20.0
	II	19.5	80.5		55.6	2.2	17.8	8.9	17.8	4.4
	III	15.5	84.5		—	15.0	20.0	35.0	30.0	5.0
	IV	15.1	84.9		—	0.0	16.7	13.3	66.7	10.0

注1 *p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

注2 「提供した相手の内訳」は、「提供した」と回答した者のうち、その相手に提供した者の割合を示している。

しかし配偶者のいないⅢ・Ⅳ群では、子どもや近隣にサポートを提供した者の割合が高くなっている。

なお、ここでは受領・提供両サポートについて男女別に示すことは紙幅の都合上割愛せざるを得ないが、その傾向を一言で述べると、先行研究と同様、男性と比較して女性の方がサポート授受を広範囲の相手と行っている様子がうかがわれた ($P<0.05$)。しかし女性でも、手段的サポートにおいてはやはり家族に特化した傾向が見られた。

(3) 家族形態別に見るソーシャルサポートとモラールとの関連

次に、サポート授受のモラールに対する影響について、家族類型別に相関分析を用いて検討する。しかし、前述のように、サポート授受を行っていない者が多く見られたので、それらの者の特徴とモラールとの関連についてまず見てゆく。

表-5は、サポート授受のあった者、なかった者それぞれのモラール得点の平均点と該当者の割合を家族類型別に示したものである。平均点については、Ⅰ・Ⅱ群 ($p<0.001$)、Ⅲ群 ($p<0.05$) で授受共に全くなかった者のモラール得点が授受があった者よりも有意に高かったが、Ⅳ群では有意差が見られなかった。すなわち、Ⅰ～Ⅲ群においては、何らかの授受を行った者よりも、全く授受を行わなかった者がモラールが高いということである。特に受領については、なかった者の多くが受ける必要がない者であったことを考えると、サポート授受の必要がないという自立性の高い者がモラール得点においては優位に立っていると言える。

表-5 サポート授受の有無別モラール平均得点と該当者の割合

家族類型	受領／提供サポート		有意差
	あり	なし	
Ⅰ	12.13 (77.9)	13.59 (22.1)	***
Ⅱ	11.89 (81.8)	13.04 (18.2)	***
Ⅲ	10.96 (73.0)	12.48 (27.0)	*
Ⅳ	11.41 (69.3)	10.75 (30.7)	

注1 「あり」には受領サポートのみあった者、提供サポートのみあった者、受領／提供両サポートがあった者を含む。

注2 上段はモラール平均点、下段のカッコ内は該当者の割合 (%)

注3 * $p<0.05$ ** $p<0.01$ *** $p<0.001$

注4 該当者の割合についての検定 $\chi^2=10.228(p<0.05)$

表-6 モラール得点との相関係数/偏相関係数

	I 群				II 群				III 群		IV 群	
	男 性		女 性		男 性		女 性		相関係数	偏相関係数	相関係数	偏相関係数
	相関係数	偏相関係数	相関係数	偏相関係数	相関係数	偏相関係数	相関係数	偏相関係数				
性別(男性=1,女性=0)	-.1)	-.1)	-.1)	-.1)	-.1)	-.1)	-.1)	-.1)	.042	-.084	.001	.024
年齢	-.069	.002	.092	.157	-.135	.029	-.114	-.008	-.136	-.105	-.086	.052
身体的健康状態	-.212*	.281**	.049	-.086	.018	.122	-.105	.186	-.167*	.030	-.125	.158*
世帯年収	-.033	.054	.107	.083	.167	.309**	.139	.231*	.107	.136	.131	.197**
近所から受ける	-.151	-.036	-.096	-.075	-.087	-.256**	-.066	.021	-.111	-.093	-.008	.162*
親しい友人から受ける	-.078	-.078	.111	.181	.052	.072	.134	.171	-.023	.003	-.024	.012
子供、子供の配偶者から受ける	-.186	.042	-.113	-.015	-.291**	-.269**	.015	.152	-.157	.081	-.058	.091
親族から受ける	-.041	-.034	.105	.124	-.008	.091	-.046	-.135	-.061	.102	-.147*	-.022
配偶者から受ける	.300**	.094	.027	.159	-.072	.003	-.172	.125	-.1)	-.2)	-.1)	-.2)
専門家から受ける	-.2)	-.2)	-.2)	-.2)	-.025	-.036	-.175	-.096	-.171*	-.126	-.084	.105
その他の人から受ける	.058	.113	.126	.007	-.083	-.117	-.166	.009	-.066	-.022	.077	.174*
誰からも受けていない	-.040	.097	-.123	.076	-.191	-.039	-.301**	.011	-.160*	.038	-.127	.101
受ける必要なし	.318**	.147	.159	.158	.204*	.005	.362	.201	.265**	.113	.205**	.167*
近所に与える	-.047	.057	-.008	.074	.094	.108	.069	.095	-.041	-.064	-.066	-.140
親しい友人に与える	.019	.088	-.010	-.045	.207*	.122	.043	.040	.073	-.004	.126	.046
子供、子供の配偶者に与える	-.053	-.034	.099	.192	.040	.126	.098	.200	-.129	-.155	.056	.070
親族に与える	-.151	-.140	-.039	.076	.062	-.037	.086	.074	-.067	-.152	-.008	-.093
配偶者に与える	.040	.129	-.154	-.043	.005	.004	-.216*	.068	-.1)	-.1)	-.1)	-.1)
その他の人に与える	-.159	-.138	.010	.039	.045	-.040	.009	.007	.009	-.028	.010	-.107
誰にも何も与えていない	.074	.057	.170	.121	-.134	-.044	.141	.078	.018	-.106	-.038	-.124

注1 I、II群は性別に分析を行うので、この説明変数は省く。

注2 この項目には全ての人が「受けなかった」と回答したため、説明変数から省く。

注3 III、IV群は配偶者がいないため、この説明変数は省く。

注4 * $p<0.05$ ** $p<0.01$ *** $p<0.001$

表-6は、モラール得点と属性変数、各授受主体とのサポート授受との相関係数、偏相関係数を示したものである。サポート授受のモラールに与える影響が性別によって異なることが明らかにされてきたため、I・II群においては男女別に分析した。III・IV群を性別に分けなかったのは、男女比に偏りがあったためである。

I群の女性では相関係数も偏相関係数も有意なものではなかったが、男性では「身体的健康状態」だけが偏相関分析において有意な影響が見られた($p<0.01$)。単相関が見られた「配偶者から受ける」、「受ける必要なし」は偏相関分析においては有意ではなかった。II群では、男性の場合、「世帯年収」に正の相関が、「近所からサポートを受領すること」「子どもや子どもの配偶者からサポートを受領すること」に偏相関分析において有意な負の相関が見られた(共に $p<0.01$)が、その他相関があった2項目は偏相関分析においてその効果は見られなかった。一方女性の場合、「世帯年収」に正の偏相関が見られた($p<0.05$)。III群では、単相関分析において5つの項目とモラール得点との有意な相関が見られたが、偏相関分析ではいずれの効果も消えてしまった。IV群では、「親族から受領すること」

($p<0.05$)、「サポートを受領する必要がなかった」こと ($p<0.01$) が、モラル得点と有意な単相関が見られ、偏相関分析においては、「身体的健康状態」、「世帯年収」($p<0.01$)、「近所から受領する」こと、「その他の人から受領する」こと、「サポートを受領する必要がなかった」ことが、有意な正の相関が見られた (それぞれ $p<0.05$)。

すなわち、独居高齢者においては、サポートを受領することにも増して「受領する必要がなかった」というある種の自立性を持つことが高いモラルにつながることで、サポートが必要な者は近隣など周囲の人からサポートが得られることが高いモラルにつながることを示唆された。一方、配偶者や子どもと同居している高齢者においては、他者とのサポート授受はモラルと有意な関連が見られず、男性において健康状態の良さが高モラルに結びついた。夫婦のみ世帯の高齢者では男女とも世帯年収の増加が高いモラルに結びついており、男性の場合、近隣や子どもからサポートを受領することはモラルの低下に結びついていて、配偶者と同居している男性の場合、配偶者以外の者からのサポート受領は本人にとって好ましくないと認識されていると考えられる。配偶者も同居子もない場合は他者とのサポート授受（とりわけ他者からの受領）は高モラルにつながるが、同居家族がいる場合には必ずしもそうではないことが明らかになった。

(4) 受領サポートと提供サポートの互酬性の分析

次に、これまで見てきたようなサポートの受領・提供のモラルに対する影響を、特に配偶者と子どもが相手の場合における互酬性という視点から検討する。各群の対象者を、受領・提供サポートのそれぞれを「あり」「なし」に分け、それぞれの該当者におけるモラル得点の平均値の差の検定を行った。

表－7 配偶者／子どもとのサポート授受とモラルとの関係

家族類型	サポート授受相手別 授受の有無	提 供 の 有 無	
		あ り	な し (有意差)
I 群	配偶者 受領あり	11.67	12.22
	なし (有意差)	11.14	13.19
	子ども 受領あり	13.40	11.55
	なし (有意差)	11.66	13.02
II 群	配偶者 受領あり	12.26	11.97
	なし (有意差)	7.20 **	12.56 **
	子ども 受領あり	14.30	11.30
	なし (有意差)	10.00	12.50
III 群	子ども 受領あり	11.40	10.76
	なし (有意差)	9.00	12.31
IV 群	子ども 受領あり	12.50	10.88
	なし (有意差)	—	11.27

注1 * $p<0.05$ ** $p<0.01$ *** $p<0.001$

注2 IV群の「受領なし・提供なし」は該当者なし

表-7は、配偶者と子ども（Ⅲ・Ⅳ群については子どものみ）とのサポート授受の有無でグループ分けし、家族類型別にそのモラルの平均点を示したものである。これを見ると、Ⅱ群において配偶者からサポートの受領をしなかった者の場合、提供もしていない方が提供した者よりモラル得点が高く、配偶者にサポートの提供をした者の場合、逆に配偶者から受領した者の方が受領していない者よりモラル得点が低下する。これは、夫婦のみ世帯という老後の夫婦生活において、配偶者とサポート授受において対等な関係を保つことがモラルの向上につながることを示していると言えよう。

6 考 察

(1) 対象者のソーシャルサポート授受

サポートの内容別に結果を見ると、情緒的サポートが受領・提供ともに最も多かった。それに介護的サポートが続くが、手段的サポートについては授受を行っていない高齢者が非常に多くなっている。これについては、①本研究での対象者は健康な高齢者がほとんどであったためサポート授受は少ない上、その必要性も感じていない人が多い、②情緒的サポートは最も認知されやすい、③情緒的サポートが最も行きやすい、④情緒的サポートが最もニーズが高い（手段的サポートが最もニーズが低い）、⑤手段的サポートの質問項目が、調査対象者の日常ではあまり行われていないことを尋ねるものだった、などが考えられる。①については、本研究の対象者が東京都内3地域における65歳以上高齢者の偏りのないランダム・サンプリングであったことを考慮すると、現在都内の在宅高齢者の多くがADL、IADLに不自由なく生活していること、言い替えれば身体機能が低下した高齢者は在宅生活を送ることは困難であることを示していると言えよう。これは実際、サポート授受を行った者の割合が非常に低かったことに表われている。また、高齢期になっても主観的健康感が非常に高い高齢者は、実際にサポートの必要性をあまり感じない高齢者が多いとも言える。②～④については、ソーシャルサポートの定義に関わることでもある。すなわち、野口（1991a）の示すように、ソーシャルサポートは(1)予期（あるサポートをしてくれそうか）、(2)実績（実際にしてもらったか）、(3)評価（それをどう思っているか）、という3側面に分けられねばならないということと関連していると言える。本研究においては、「実績」を尋ねたものの、それが「予期」や「評価」とつながったものであり、また、その「実績」がニーズによるものなのか、それとも得られやすいため得ていたのかまではわからない。また、サポートの質問項目において「予期」を尋ねた場合、授受の「予期」の多さが高いモラルに結びつくとも言われている。⑤については、宮下ら（1992）によれば、老親の役割として「法事や墓参り」、「月々の生活費を出す」、「家事をする」などがあげられているが、そのような質問項目を含んでいなかったため、日本的な高齢者のサポートにおける役割を測定しきれなかったという点も否めない。

全体として、高齢者のサポートは、提供よりも受領の方が多かった。これは、Arling（1976）の言うように、子が親に依存していた状態から、親が子に依存する状態となる「役割逆転」が起きているということを表すものであろう。

また、特に手段的サポートにおいて、家族類型別によって授受の有無とその相手に差が見られた。これは、手段的サポートが主に配偶者や子どもといった親族間で行われるものであり、そのような親族が身近にいない高齢者にはその授受の機会が少ないことを示していると言えよう。それに比較して情緒的

サポートにおいては、家族類型によって授受の有無に有意差は見られなかったが、その相手には差が見られた。すなわち、有配偶の高齢者は配偶者や子どもとの授受が中心であるが、配偶者のいない高齢者は、友人や近隣など、親族以外の人とも授受していた。これは、情緒的サポートは身近な親族がいなくても親族以外の人をサポート源になりうる可能性があるが、手段的サポートについてはそうではないということを示唆している。

(2) 家族類型によるサポート授受とモラルとの関連性

サポート授受とモラルとの間での単相関・偏相関分析によれば、独居高齢者において「サポートを受ける必要がない」とモラルとの間に有意な正の相関が見られた。「受ける必要がない」ということは活動能力を維持していることであり、先行研究とほぼ一致した結果となった。

また、独居高齢者において、近隣、その他の人からのサポート受領とモラルとの間に有意な正の相関が見られた。これは、配偶者や子どもといった同居家族が全くいない独居高齢者にサポート受領の必要性が生じた場合、家族以外の、しかも近隣という物理的に身近なところにサポート供給資源が存在することが重要であることを示唆している。Litwak (1969) は第一次集団の機能について検討し、近隣の機能は緊急性・地域性・日常性、親族の機能は永続性・長期の看病・個人の態度や重要事項を形成するための決定的な役割、友人の機能は親密性・比較的長期のつきあい、と各々異なる機能を果たすと述べている。これを考慮すると、高齢期には身体的にも経済的にも衰退するため、同居家族がいない場合、日常的にサポートしてくれる人が物理的に近居であることが重要となることが明らかになった。

サポートの互酬性という点から見ると、夫婦のみ世帯における配偶者とのサポートの互酬性のみがモラルに影響を与えていた。老後の夫婦のみ世帯において、お互いに年齢を重ねるごとにサポートが必要が増すため、お互いに助け合うというサポート授受における対等な関係を保つことが、精神衛生上好ましいと言えよう。

また、先行研究では配偶者の有無、または配偶者とのサポートの授受の有無がモラルに大きく影響していた（金ら、1996）。本研究でも、Ⅰ～Ⅳ群に移行するにつれモラル得点の平均点が低下していたため、配偶者の有無がモラルに影響していることが明らかになったと言えよう。これは、サポート授受の相手についての分析でも見られたように、本当にニーズの高い時に高齢者が受領する手段的・介護的サポートの提供という役割の多くが配偶者によって担われており、その他の者は代替になりにくく、独居高齢者はサポートの受領が難しくなることによると言える。

7 結論と今後の課題

以上、高齢者のサポート授受パターンについての分析、その授受がモラルに与える影響について分析してきたが、ここで明らかになったことは以下の通りである。

- ①家族類型がⅠ群（配偶者も同居子もいる高齢者）からⅣ群（独居高齢者）に移行するにつれ、モラル得点平均値が有意に低下してゆく。これは、主なサポート授受の相手である家族員が身近にいるためであると考えられる。
- ②情緒的サポートでは家族類型によって授受の有無に差はなかったが、それ以外の手段的・介護的サポー

トについては、Ⅰ～Ⅳ群に移行するにつれ、サポートの授受を行っていない高齢者が増加する。つまり、情緒的サポートの授受は配偶者や同居子と同様にその他の者が授受の相手となりうるが、手段的・介護的サポートについては配偶者・同居子が主な担い手であり、その他の者は家族員の代わりとはなりにくいと思われる。

③情緒的サポートは広範囲の相手と授受を行っているが、それ以外のサポートは主に配偶者や子どもからの受領が多い。配偶者や子どものいない高齢者は、家族以外の近隣などからサポートを受領できるならばモラルに影響はないが、そうでない場合は「受領したかったが受領できなかった」という状態に陥り、モラルに負の影響を与える。

④独居高齢者では、サポートを受ける必要がないという自立性を保つことが、モラルに正の有意な影響をもっていた。

⑤サポートが必要な独居高齢者では、近隣、その他の人からのサポート受領とモラルとの間に有意な正の相関が見られた。

⑥夫婦のみ世帯において、配偶者とのサポート授受に有意な交互作用が見られた。これは、高齢者二人だけで暮らしている場合、お互いに加齢と共に様々なサポートが必要となるため、夫婦で「助け合う」という形で互酬性を保つことが、モラルを維持するために重要であることを示唆している。

以上の結果は、家族類型、特に配偶者と同居子の有無によってサポート授受のパターンが異なっていること、モラルを維持する上で重要な要因が異なることを示している。特に独居高齢者においては、特に手段的サポートと介護的サポートの受領が少なかった。これは、それらの主たる提供主体である家族が身近にいないためである。一方、配偶者も子どももいる高齢者は、主なサポート授受の相手が配偶者や子どもであるため、サポートを受けられない不自由さはないように見受けられる。しかし今後、さらに核家族化が進行し、老親と同居する既婚子は減少していく。その場合、高齢者は必要なサポートを周囲から受領できるだろうか。また、本稿では明らかではなかったものの、多くの先行研究において、提供サポートはモラルに正の効果を持つと言われているが、そのようなサポートを提供する先があるのだろうか。

本稿では、配偶者と同居子のみに着目した。しかし、先行研究では孫との同居がモラルに正の影響を持つことを明らかにしたもの（杉井・本村，1992）や、「単身」「夫婦のみ」「拡大家族」と分類して検討したものなど（杉井，1992）があり、適切な分類方法が何なのかについてははっきりしていない。また、同居家族のみならず近居の別居子の果たす役割も今後大きくなるであろう。家族員間のサポート授受について、また、家族員間の役割について、今後より適切に測定することが必要である。

本研究でのサポートの「量」については、サポート源が多ければ授受されたサポートも多いとみなし、ある一時期にあるサポートを授受した相手の数のみ尋ねており、その頻度は尋ねていない。しかし、サポートの授受、特に交換や互酬性については、石川（1989）が示すように「分配正義の問題」がある。これは、数量的に均衡していれば等価であるのではなく、当事者にとってどの程度の受領・提供があれば等価とみなすのかという認知・情緒的な問題である。一時点でサポート授受の数量が均等ならば互酬的であると言えるのかについては、交換理論がまだ理論的に未熟であるために残された課題であると言える。

注

- (1) 本調査は「高齢者の生活環境に関する調査研究」（主査：袖井孝子お茶の水女子大学教授）の一部として行われた。調査実施機関は(社)中央調査社である。
- (2) この家族類型別のモラル得点平均値の差の検定を行ったところ、大きく分けてⅠ・Ⅱ群とⅢ・Ⅳ群の間で有意差があった。つまり、配偶者の有無で差が見られるが、子どもの有無によっては差がないということである。

付記

- (1) 本研究は国際長寿センター「高齢者が捉える生活環境要因についての調査研究」（主査：袖井孝子お茶の水女子大学教授）の一部としてなされたものである。この研究の主査であり指導教官であるお茶の水女子大学の袖井孝子先生、国際長寿センターの工藤由貴子先生、CRC総合研究所の林廓子先生をはじめ、研究会の先生方にはご支援を頂いた。感謝の意を示したい。
- (2) 本稿は、第7回日本家族社会学会大会（於：早稲田大学国際会議場）での自由報告「都市居住高齢者のソーシャルサポートとそのモラルとの関連性」に加筆・修正したものである。

文 献

- Antonucci, T.C., 1990, "Social Support and Social Relationships," in Binstock, R.H. and George, L.K. (eds.), *Handbook of Aging and Social Science*, Academic Press, 205-226.
- Arling, G., 1976, "The Elderly Widow and Her Family, Neighbors and Friends," *Journal of Marriage and the Family*, 38, 757-768.
- Dayton, B.I. and Antonucci, T.C. 1988, "Reciprocal and Nonreciprocal Social Support: Contrasting Sides of Intimate Relationships," *Journal of Gerontology*, 43, 3, 65-73.
- Depner C.E. and Ingersoll-Dayton B., 1988, "Supportive Relationships in Later Life," *Journal of Psychology and Aging*, 3, 4, 348-357.
- Dowd, J.J., 1975, "Aging as Exchange: A Preface to Theory," *Journal of Gerontology*, 30(5), 584-594.
- 石川実, 1989, 「家族研究における社会的交換理論」, 『家族関係学』, 8, 29-35.
- 石原治・内藤佳津雄・長嶋紀一, 1989, 「健康度とモラル・満足度との関係」, 『社会老年学』, 30, 75-79.
- 河合千恵子・下仲順子, 1992, 「老年期におけるソーシャル・サポートの授受 別居家族との関係の検討」, 『老年社会科学』, 14, 63-72.
- 金恵京・李誠國・久田満・甲斐一郎, 1996, 「韓国農村地域の在宅高齢者におけるソーシャルサポートの授受とQOL」, 『日本公衆衛生雑誌』, 43, 37-49.
- 国際長寿センター, 1995, 『高齢者が捉える生活環境についての調査研究報告書』.
- 古谷野亘・柴田博・芳賀博・須山靖男, 1989, 「PGC モラルスケールの構造 —最近の改訂作業がもたらしたもの—」, 『社会老年学』, 29, 64-74.

- 古谷野亘・岡村清子・安藤孝敏・長谷川万希子・浅川達人・横山博子・松田智子, 1995, 「都市中高年の主観的幸福感と社会関係に関連する要因」, 『老年社会科学』, 16(2), 115-123.
- Lawton, M.P., 1972, "The Dimensions of morale," in Kent, D.P., Kastenbaum, R. and Sherwood, S. (Eds.), *Research Planning and Action for the Elderly: The Power and Potential of Social Science*, Behavioral Publications.
- Lawton, M.P., 1975, "The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A Revision," *Journal of Gerontology*, 30(1), 85-89.
- Litwak, E. and Szelenvi, I., 1969, "Primary Group Structures and their Functions: Kin, Neighbors, and Friends," *American Sociological Review*, 34, 465-481.
- Litwak, E., 1985, *Helping the Elderly*, The Guilford Press.
- 前田尚子, 1991, 「老人のソーシャルサポートリソース選択について」, 『家族関係学』, 10, 23-34.
- McCulloch, B. J., 1990, "The Relationship of Intergenerational Reciprocity of Aid to the Morale of Older Parents: Equity and Exchange Theory Comparisons," *Journal of Gerontology*, 45, 150-155.
- 宮下美智子・藤田祥子, 1992, 「老親と既婚子の役割関係(1)」, 『家族関係学』, 11, 47-60.
- Morgan, D.L., Schuster, T.L. and Butler, E.W., 1991, "Role Reversals in the Exchange of Social Support," *Journal of Gerontology*, 46(5), 278-287.
- 野口裕二, 1991a, 「高齢者のソーシャルサポート：その概念と測定」, 『社会老年学』, 34, 37-48.
- 野口裕二, 1991b, 「高齢者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート ―友人、近隣、親戚関係の世帯類型別分析―」, 『老年社会科学』, 13, 89-105.
- Robert, K.A. and Scott, J.P., 1986, "Equity Consideration in the Friendships of Older Adults," *Journal of Gerontology*, 41, 241-247.
- 杉井潤子, 1992, 「高齢者が認知する資源利用可能性に関する一研究 ―家族形態との関連において―」, 『家族関係学』, 11, 1-13.
- 杉井潤子・本村汎, 1992, 「高齢者の主観的幸福感をめぐる一研究 ―家族システムの構造的要因との関連において―」, 『家族社会学研究』, 4, 53-65.
- 浦光博・南隆男・稲葉昭英, 1989, 「ソーシャル・サポート研究 ―研究の新しい流れと将来の展望―」, 『社会心理学研究』, 4(2), 78-90.
- 横山博子, 1989, 「主観的幸福感と活動の関係について ―活動に対する態度の視点から―」, 『老年社会科学』, 11, 151-166.

(ひらの じゅんこ・お茶の水女子大学)